

インド・グジャラート州における
牛移牧集団の社会経済分析
—ラージャスターン州からの雌牛移牧集団を事例として—

篠 田 隆

**A Socio-economic Analysis of the Seasonal
Graziers of Cows in Gujarat, India**
-With Special Reference to the Seasonal Graziers from Rajasthan-

Takashi SHINODA

『大東文化大学紀要』第49号
〈社会科学〉〈抜刷〉
2011年3月 発行

インド・グジャラート州における
牛移牧集団の社会経済分析
—ラージャスターン州からの雌牛移牧集団を事例として—

篠 田 隆

**A Socio-economic Analysis of the Seasonal
Graziers of Cows in Gujarat, India**
-With Special Reference to the Seasonal Graziers from Rajasthan-

Takashi SHINODA

はじめに

1. 調査地域と調査対象

- (1) 出身村の社会経済構造と畜産
- (2) 契約村の社会経済構造と飼料基盤
- (3) 受け入れ村における契約の経緯

2. 移動経路

- (1) 「緑の革命」前の経路
- (2) 現在のグジャラート州での主要な移動経路
- (3) 調査世帯の移動経路

3. 契約村での牧畜生活

- (1) 野営地での住居と家畜施設
- (2) 移牧集団の構成
- (3) 男女別の労働パターン
- (4) 牛構成の特徴
- (5) 家畜の移転
- (6) 購入飼料
- (7) 食料支出
- (8) その他の支出

おわりに

はじめに

筆者は2009年8月から2010年8月にかけて、インド西部のグジャラート(Gujarat)州とラージャスターン(Rajasthan)州において、牛の移牧集団^(注1)の社会経済調査を行った。本稿はその調査結果の一部である^(注2)。

羊の移牧については多数の研究成果が刊行されている。とくに、オックスフォード大学出版局から刊行された、Kavoori(1999)、Agrawal(1999)、Srivastava(1997)などは、社会的に見えない存在であった移牧集団の地域社会や国家との関わりに光を当てただけではなく、移牧集団が開発や環境変動のなかで果たしている積極的な役割を評価している。斬新的な分析枠組みと精緻な実証が組み合わされたこれら研究は、移牧研究のブームさえ引き起こした。もうひとつの羊移牧研究の成果は、移牧の歴史の変遷についても鋭い洞察を加えたことにある。このように、羊の移牧研究は時間軸と空間軸の交差する舞台での民族誌として、ますます深みを加えていった。

移牧研究は羊だけを対象としたわけではない。駱駝やヤクなどの家畜も研究の対象とされた。ここでも真の研究対象は家畜の背後にいる牧畜民と彼らの地域社会との関わりであった。

これだけ様々な家畜の移牧と牧畜民とのかかわりが研究されたにも関わらず、牛の移牧についての研究は独立後においては、ほとんど行われてこなかった^(注3)。その主要な理由は、独立後の「緑の革命」^(注4)や「白い革命」^(注5)などの社会経済変化のなかで、牛の飼養形態が放牧から舎飼いに移行し始めた結果、移牧の事例そのものが大きく減少したことにある。さらに、牛の移牧は羊の移牧よりも局地的な現象なので、研究者の目にとまりにくい側面もある。

本稿では、牛移牧集団や移牧先で彼らと関わる契約村関係者などからの聞き取り調査に基づき、移牧集団の組織、労働、収支、リスクのほか、移動経路の変動や契約条件の詳細について論じる。牛移牧集団のサンプル数は10世帯と小規模であるが、先行研究が乏しいなか、事例研究として一定の意義があると考えられる。

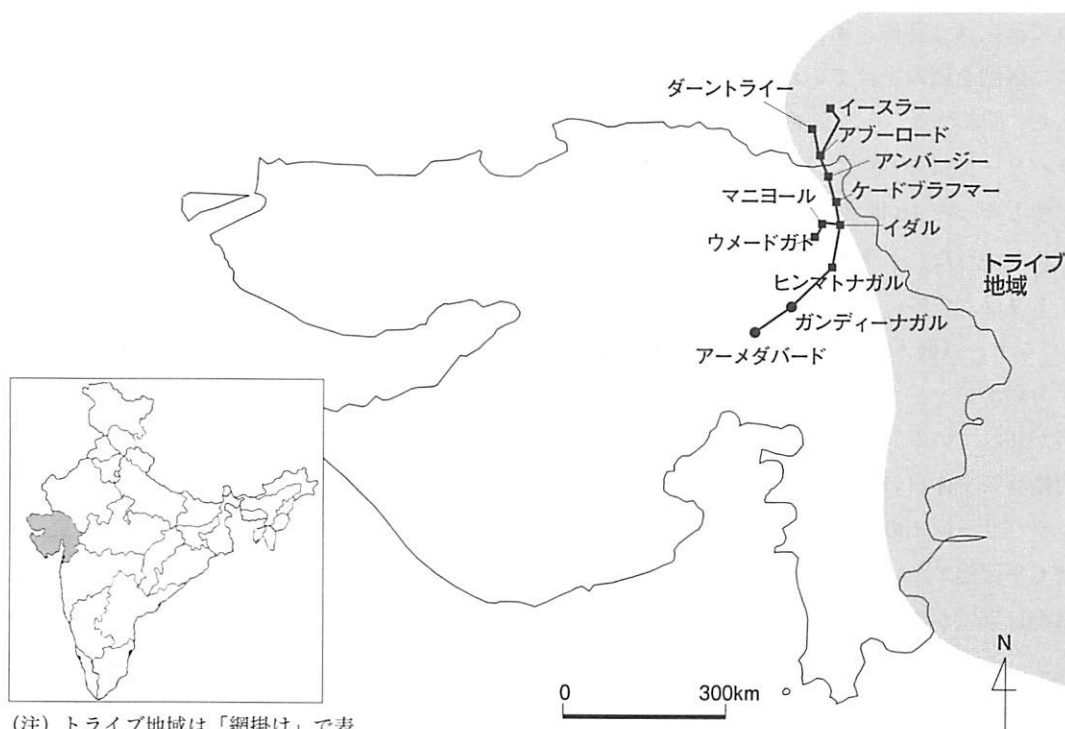
本稿の構成は以下のとおり。第1節で移牧集団の母村と移牧先での契約村の詳細と契約の経緯を述べる。第2節では移牧の移動経路の歴史の変遷と調査世帯の移牧経路を詳細に跡付ける。第3節では契約村における牧畜生活を、組織、労働、収支などの側面から検討する。契約村を出て母村に戻るまでの期間の牧畜生活についても言及する。最後に、「おわりに」で重要な論点をまとめ、展望と課題を示す。

1. 調査地域と調査対象

(1) 出身村の社会経済構造と畜産

今回の調査対象になった移牧集団は2組で、彼らの出身村はラージャスターン州シローヒー(Sirohi)県のダントライ(Dantrai)村とイスラー(Isra)村である。シローヒー県は図1に

図1 調査地域の関連都市村落



(注) トライブ地域は「網掛け」で表示している。関連都市村落間の幹線支線道路は実線で示した。

(出所) 筆者作成

みるように、ラージャスターン州の南部のトライブ^(注6)地域に位置している。ラージャスターン州南部から南はグジャラート北部、東はマディア・プラデーシュ (Madhya Pradesh) 州東部にかけて丘陵部が広がっている。トライブの集住地域は網掛けで表示した地域に展開している。州境沿いの丘陵地域であるため、開発からは取り残されてきた。灌漑も展開せず、農業もカリフ作 (秋作) 中心の粗法的な農業で、土地生産性も低かった。この地域にはトライブとともに牧畜カーストのラバリー (Rabari)^(注7)が多数居住している。

イスラー村はトライブ主体の村で、主要な社会集団はビール (Bhil) などのトライブ、ラバリー、メグワル (Meghval) などの指定カースト (歴史的に差別されてきたことを理由に、憲法で優遇政策の対象とされている集団)、それにムスリムなどで、1300世帯6000人ほどが居住している。村の面積9000haのうち、6000haは放牧地などの共有地で、農地は3000haほどである。農業はトウモロコシ、バジリー (トウジンビエ) などの飼料作として有用なカリフ作主体で、冬作や夏作は展開していない。村までのアクセス道路は舗装されているが、広大な村内に点在する居住区をつなぐ道路は未舗装である。電化されたのは2007年と比較的近年のことである。現在の村長 (サルパンチ) はトライブの女性が務めている。

ラバリーは260世帯ほどで、いくつかのラバリー集住区に分散していた。住居は平屋の煉瓦作りで部屋は2部屋、屋根のかかったベランダに子牛の置場を設けていた(写真1)。庭先のスペースに厩肥を積み上げていたので、2010年8月に当地を訪問調査した際には、屋内も蠅だらけであった。質素なつくりの家屋であった。村内のラバリーの就学率は他のカーストに比べて極端に低く、ラバリー世帯の90%ほどは季節放牧に出ているということであった(注8)。ここには、今回の調査対象となった10世帯のうち、5世帯が居住している。他のカーストの住区にも豪勢な建造物はみられなかった。トライブ地域の貧しい一村との印象を受けた(写真2)。

もうひとつの、ダートライー村のカースト構成はイスラー村と大きく異なり、ジャイナ教徒(バニヤー(商人)カーストとも呼ばれている)が多数居住する村である。村人口4000人余りの半分弱がジャイナ教徒に占められている。村内にジャイナ教徒の寺院が4つあり、村外からも参拝者が訪れている。バニヤーの多くは一部の家族を村に残し、他地域で商売に従事している。村には冠婚葬祭や休日の際に戻ってくる。

ラバリーは100世帯ほどで、ラバリー住区に集中していた。村内の主要路も舗装されており、住居も平屋建てではあるが、イスラー村におけるラバリーの住居よりはしっかりと建設されていた。畜舎は家屋から離れたところに建てていた。庭先に厩肥を積み上げていないので、屋内でも蠅は少なかった。村人の話では、村内のバニヤーの生活スタイルが他の村民にも影響を与えており、これもそのひとつであるとのことであった(注9)。

(2) 契約村の社会経済構造と飼料基盤

ラージャスターン州からの上記移牧集団は各々グジャラート州内のマニヨール(Maniyor)村とウメードガド(Umedgadh)村と放牧契約を結び、それらの村に昨年11月から今年の5月まで滞在した。両村ともにサーバルカーンター(Sabarkantha)県のイダル(Idal)郡に属する。イダル郡は県西部の真中ほどに位置する。郡庁のあるイダル市はこの一帯の最大の市場町である。図1にみるように、両村はケードブラフマー(Khedbrahma)からイダルを経由しヒンマトナガル(Hinmatnagar)に至る幹線路から西に入り込んだ位置にある。両村の概況について個別に検討しておこう。

マニヨール村は人口2208人、面積1039ha(2001年国勢調査)のこの地域では比較的大きな村である。面積は近隣の村を大きく上回っている。イダルから西方メーヘサーナー(Mehsana)方向への支線道路を5キロほど進んだ道路沿いに位置している。村の農地面積のうち灌漑面積は350ha、非灌漑面積は500ha、放牧地面積は136ha、荒地その他の面積は15haであった(注10)。灌漑率は当地で一般的な40%ほどの水準で、灌漑源は井戸と菅井戸である。降雨依存の面積も大きいので、農業生産は雨期の降雨の状況に大きく影響を受けている。

イダル郡の主要な作物は、小麦、米、モロコシ(ジョワール)、トウジンビエ、トウモロコシなどである。マニヨール村の近年の作物構成は、綿花、唐胡麻、モロコシ、小麦などである(注11)。このうち、唐胡麻、モロコシ、小麦は飼料価値の高い作物である。広い耕地と飼料価値の高い作物が栽培されているので、移牧集団にとってたいへん魅力的な村である。

マニヨール村の主要なカースト集団は、パーティーダール (Patidar)、ラージプート (Rajput) などの土地所有集団、ワンカル (Vankar)、チャヌアー (Chanua) などの低カーストである。ラバリーなどの牧畜カーストはまったく居住していない。この村の土地所有規模と土地経営の特徴は、パーティーダールが支配カーストとして農地の多くを所有していること、農業経営は村外から流入してくるトライブ労働者への小作や刈取契約および村内の指定カーストなどの日雇に依拠して行われている点にある。2001年国勢調査によると、村に指定部族は居住していないことになっている。村外から流入する指定部族は小作地にある簡易住居に一時的に滞在するので、国勢調査ではカウントされていないが、彼らが最も主要な労働力源となっている。同じく、2001年国勢調査によると、村内の男子主要ワーカー (621人) に占める耕作者 (214人) の比率は34%と隣村の同比率よりもかなり低く、反対に農業労働者 (164人) の比率は26%と高い方である。村人口の23%は指定カーストで彼らが日雇労働力の主要な供給源となっている^(注12)。

ウメードガド村は人口2248人、面積761ha (2001年国勢調査) の村で、図1にみるように、イダルから西方メーヘサーナー方向への支線道路を14キロほど進んだ先に位置している。農地607haのうち、灌漑地は324ha、非灌漑地は283haである^(注13)。灌漑率はこの一帯では高いほうである。放牧地などの耕作可能荒蕪地は32ha、耕作不能地は109haである。

ウメードガド村の近年の主要作物は、村書記によると、綿花、唐胡麻、小麦、モロコシなどであった。この作物構成は、マニヨール村のものと類似しており、飼料価値の高い作物が多い。

ウメードガド村の主要な土地所有集団は、パーティーダール、タツカルダー (Thakkarda)、バラモン (Brahman)、コーリー (Koli)、ワンカルなどである。ラバリーは1世帯のみである。この村でもパーティーダールが支配カーストとして主要な土地所有集団を形成し、村外から季節的に流入する指定部族と刈取契約を結び、村内の指定カーストを日雇として活用し経営を行っている。11月から1月までは綿花の摘み取り、それ以降は小麦の刈取のシーズンになる。ちなみに、2001年国勢調査によると、村内の男子主要ワーカー (559人) に占める耕作者 (195人) の比率は35%、農業労働者 (135人) の比率は24%であり、村人口の22%を占める指定カーストが主要な日雇労働者の供給源となっている^(注14)。このように、土地経営のパターンがウメードガド村の場合と類似している。

(3) 受け入れ村における契約の経緯

マニヨール村では20年ほど前からラージャスターンからの牛移牧集団と契約を結び受け入れを開始した。当初は名目的な額であったが、2年ほど前から契約額が急激に上昇し始めた。ちなみに、5年前の契約額は4万ルピー (インドの通貨。現在、1ルピー=2円)、今年は10万ルピーであった。村には牧畜カーストがまったく居住しておらず、外部の移牧集団との契約に対する反対は当初からみられなかった。同じ家族構成の移牧集団が継続して移牧に訪れているので、村民と移牧集団との人間関係は良好である。ちなみに、調査時におけるウメードガド村の家畜構成は、交配種雌牛200頭、水牛800頭、雄牛250頭、ヤギ200頭余りであり、大型家畜の主要な所有者は支配カースト

のパーティーダールであった^(注15)。

ウメードガド村では5年前にラージャスターンからの牛移牧集団と契約を結び始めた。それまで、ラージャスターンから羊飼養者が短期間移牧に来ることはあったが、契約は結んでいなかった。当時は、村内の家畜飼養者が村の放牧地や開放された圃場で日帰り放牧を行っていたので、外来の移牧集団と契約を結ぶ余地はなかった。その後、村内の家畜飼養が舎飼いに移行し、日帰り放牧は行われなくなった。村にはラバリー1世帯が居住しているが、移牧集団の村内での放牧を了解してもらった。調査時におけるウメードガド村の家畜構成は、交配種雌牛50頭、在来種雌牛10頭(ラバリー所有)、水牛250頭、雄牛50頭、ラクダ10頭、ヤギ60頭余りであり、この村でも大型家畜の主要な所有者は支配カーストのパーティーダールであった。契約額は当初、名目的金額であったが、この地域における契約額が近年大幅に上昇したのを受け、ウメードガド村では今年は8万ルピーを徴収した。飼料基盤の大きさを基準に契約額が改定されるようになっており、雨期が順調であれば契約金は上昇させると村長は述べている^(注16)。

両村ともに、契約は村民の合意の上で村長が行うが、村の公式な出納簿には計上されない。契約額はディワリー(大晦日)直前の契約時に頭金が、契約終了時に残金が支払われた。契約金は両村ともに祭の際の食事や寺院の補修など公共的目的のために出費された。

2. 移動経路

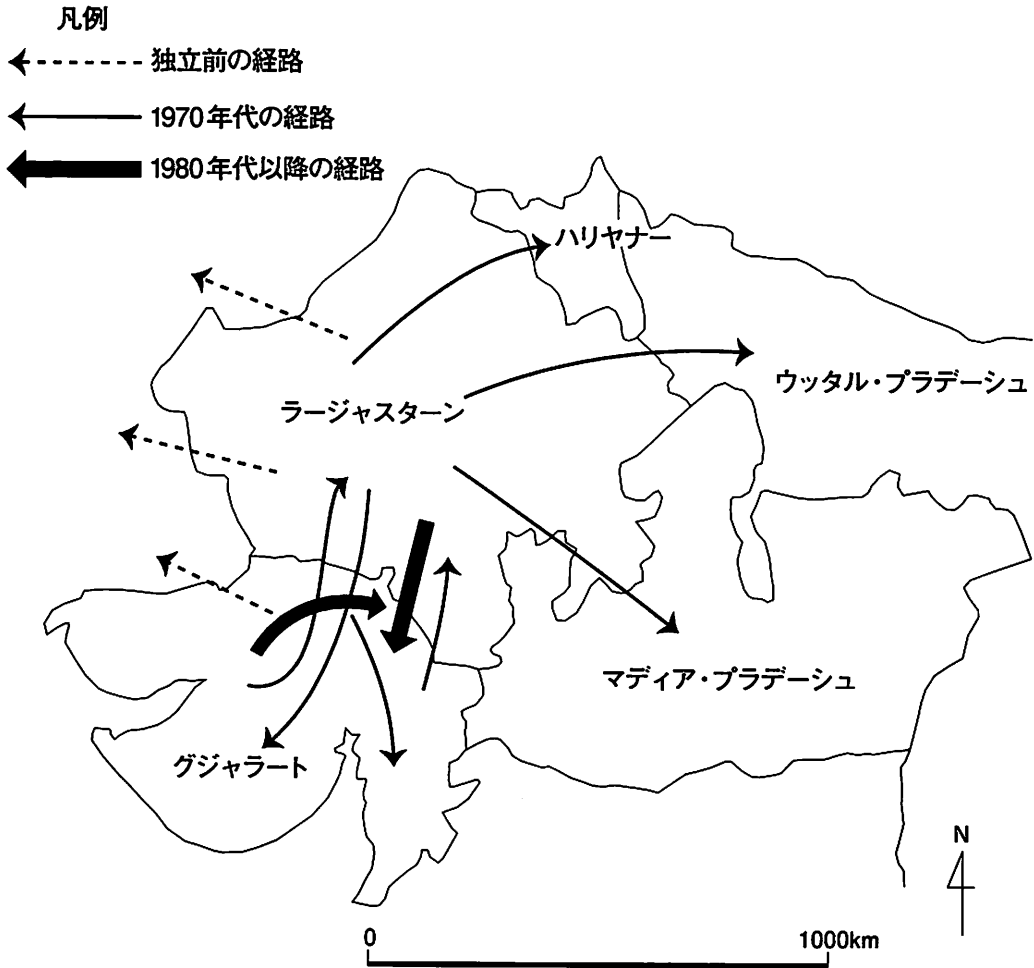
(1) 「緑の革命」前の経路

グジャラートとラージャスターンにおける移牧のルートは、図2にみるように、この100年の間に大きく変化した。独立による移動経路の遮蔽、土地改革にともなう土地所有および土地利用方式の変化、家畜頭数増加による植生に対する負荷の増大などが、移牧の移動経路とパターンに変化をもたらした。

1947年の独立(印パ分離独立の形をとった)以前には、グジャラートからパキスタンのシンド(Sind)への牛、羊、山羊の移牧が行われていたこと、ラージャスターンからもインダス(Indus)河畔の草生の豊かな地域への移牧があったことが確認されている(Kavoori:1999, Agrawal:1999, Bharwada & Mahajan:2006らの研究)。独立によりこの流れは一旦遮断されたが、バングラデシュ(旧東パキスタン)がパキスタンから独立する1972年前まではグジャラートからシンドへの移牧が実質的に継続していた。

印パ分離独立後には、環境変動に起因する移牧経路の変化も起きた。たとえば、ラージャスターンでは家畜の飼料となる草や樹木の種類と利用可能量の減少がみられ、その結果、ラージャスターン内部での移牧経路に変動が生じた(Kavoori:1999)。豊かな牧草地であったところの植生の劣化はグジャラートのバンニー(Banni)でも生じている。カッチ(Kutch)の一角をなすバンニーはかつてグジャラートにおける家畜の再生産(種の維持、育成)を支える牧草地であったが、外来種灌木の異常発生などにより植生劣化と放牧環境劣化(棘や家畜に害を与える草木の繁殖など)が進ん

図2 西インドにおける移牧経路の変動



(出所) Kavoori (1999 : 28) の Map II .1 を参考に筆者作成

だ。

以上の結果、羊に関してではあるが、1970年代にはラージャスターンを起点とする3方向への移牧の流れが確認されている (Kavoori:1999, 27-29)。第1は、ラージャスターン広域からハリヤナー (Hariyana) 州やウツタル・プラデーシュ (Uttar Pradesh) 州など東北部への動き。第2は、ラージャスターンの中部・南部からマディア・プラデーシュ州への動き。第3は、西部ジャイサルメル (Jaisalmer)、中部ジョードプル (Jodhpur)、南部シローヒーからグジャラートのパランブル (Palaupur) を経由してサウラーシュトラ (Saurashtra : グジャラート半島部) のジュナーガド (Junagadh)、中央部のヴァドーダラー (Vadodara) にまで至る動きである。グジャラートのカティアワード (Kathiavad) 半島部からラージャスターン南部への羊移牧の動きもあった。

移牧に関するこれまでの研究は羊を扱ったものばかりで、牛の移牧については記録がほとんど残っていない。今回の牛移牧の調査で、サンプル世帯の一部から以前の移牧のルートについても聞き取りを行ったので、その要点を以下に記す。

ひとつは、独立前から独立後の1950年代にかけて、ラージャスターンのウダイプル(Udaipur)から南の丘陵地帯にかけての地域は豊かな森林地帯であったので、シローヒー県からのみならず、グジャラートからも移牧集団が入ってきていた。その一帯では、下草や花、実などの飼料が豊富であったが、独立後に大規模な伐採が進み、ここへの移牧の流れは止まった。

第2は、ジョードプルを経由し、ハリヤナーに入る経路である。ハリヤナーの農業は非常に発展しているため、飼料が豊富に得られ、魅力的な移牧先である。最近までこの経路での牛移動が行われていたそうである。ただし、きわめて長距離の移動になるため、往来は容易ではなく、数年前に調査村から移牧に出た2世帯は、そのままハリヤナーに定着したとのことである。

第3は、調査村の羊移牧者のなかには、現在でもマディア・プラデーシュ州へ移牧に出る者がいるとのことである。

第4は、グジャラートへの牛移牧は、25年ほど前から始めたそうである。それ以前にはグジャラートからラージャスターンへの移牧者の流れがあったが、ラージャスターンでの農業の停滞(それに伴う飼料不足)とグジャラートにおける農業発展が明確になってからは、グジャラートへの移牧の流れが主流になったとのことである(注17)。

(2) 現在のグジャラート州での主要な移動経路

現在のグジャラート州における移牧の流れには、サウラーシュトラ内でのジューナーガドへの牛の移牧経路、カッチ東部からサーバルカーンターへの羊移牧の流れ、ラージャスターンからサーバルカーンターへの牛移牧の流れがある。また、現在は動きは止まっているが、1985～87年の3年連続の早魃時にはカッチとサウラーシュトラから多数の牛飼いが牛その他の資産とともにケーダー(Kheda)県へ、さらには遠くマディア・プラデーシュ州へと移動し、そこに定着した歴史もある。南グジャラートとグジャラート東部の丘陵地帯(トライブ地域)では移牧の動きはほとんどみられない。このように、現在のグジャラートにおいてサーバルカーンターは州内あるいは隣接州から牛あるいは羊の移牧を引き付ける地域となっている。移牧を引き付ける理由には、灌漑農業の展開、比較的大規模な土地所有、開放圃場における飼料基盤の大きさ、ミルク取引網の確立と安定した生産者乳価などがある。グジャラートには例えばメーヘサーナーやバナースカーンター(Banaskantha)のように、農業とミルク取引網が確立した地域はあるが、土地所有規模が小さく、地元で強力な牧畜カーストが存在するなど、サーバルカーンターほどに良い条件が重なっているところは少ない。サーバルカーンターにはこのように州内や州外から移牧のために多数の集団が押し寄せるようになったために、村の放牧権についての契約料は近年大きく上昇する状態が続いている。

(3) 調査世帯の移動経路

調査世帯の移動、移牧経路を検討しておこう。マニヨール組は11月中旬に、5家族揃ってダーントライー村を出発した。13日をかけて契約したマニヨール村に到着した。出発して3日目から上りの難所に入った。4日目に州境を越え、5日目にアンバージー（Ambaji：アンバージー寺院の位置する宗教都市でグジャラート各地から巡礼者が訪れる）に到着した。ここはトライブ地域のなかで唯一安全な場所で市場もある。アンバージーは山越えルートの頂点に位置し、標高は約500メートルである。ここから先は全体としては下りであるが、小さな上りと下りが続く。道路わきは丘陵でまれに人家がぼつんと見えることはあるが、人気は少ない。この景観はケードブラフマーの北

表1 移牧集団の移動経路と滞在日数

(1) マニヨール組					(2) ウメードガド組				
通し番号	滞在地	県	州	滞在日数	通し番号	滞在地	県	州	滞在日数
1	Maniyor	Sabarkantha	Gujarat	180	1	Umedgadh	Sabarkantha	Gujarat	180
2	Oda	Sabarkantha	Gujarat	1	2	Jader	Sabarkantha	Gujarat	1
3	Sabalvad	Sabarkantha	Gujarat	1	3	Mahadevpur	Sabarkantha	Gujarat	1
4	Babsar	Sabarkantha	Gujarat	1	4	Hajipur	Sabarkantha	Gujarat	1
5	Dharoi	Sabarkantha	Gujarat	2	5	Salal	Sabarkantha	Gujarat	3
6	Satlashn	Mehsana	Gujarat	1	6	Poglu	Sabarkantha	Gujarat	1
7	Ratanpur	Banaskantha	Gujarat	2	7	Palasal	Sabarkantha	Gujarat	1
8	Motasad	Banaskantha	Gujarat	1	8	Aminpur	Sabarkantha	Gujarat	30
9	Thuwar	Banaskantha	Gujarat	1	9	Bakarpur	Sabarkantha	Gujarat	1
10	Jalotra	Banaskantha	Gujarat	2	10	Limla	Sabarkantha	Gujarat	2
11	Mervad	Banaskantha	Gujarat	1	11	Balisna	Sabarkantha	Gujarat	5
12	Virpur	Banaskantha	Gujarat	2	12	Limla	Sabarkantha	Gujarat	1
13	Palanpur	Banaskantha	Gujarat	2	13	Pratij	Sabarkantha	Gujarat	1
14	Chandisar	Banaskantha	Gujarat	1	14	Poglu	Sabarkantha	Gujarat	1
15	Disachokdi	Banaskantha	Gujarat	25	15	Salal	Sabarkantha	Gujarat	1
16	Ranapur	Banaskantha	Gujarat	1	16	Hajipur	Sabarkantha	Gujarat	1
17	Nanibhakhar	Banaskantha	Gujarat	2	17	Dannda	Sabarkantha	Gujarat	1
18	Vagh Road	Banaskantha	Gujarat	1	18	Daramali	Sabarkantha	Gujarat	1
19	Hebatpur	Banaskantha	Gujarat	2	19	Sapavada	Sabarkantha	Gujarat	1
20	Chitramani	Banaskantha	Gujarat	3	20	Idar	Sabarkantha	Gujarat	2
21	Umarkot	Banaskantha	Gujarat	1	21	Vadali	Sabarkantha	Gujarat	1
22	Khara	Banaskantha	Gujarat	3	22	Vadota	Sabarkantha	Gujarat	1
23	Kapasiya	Banaskantha	Gujarat	4	23	Khedbrahma	Sabarkantha	Gujarat	1
24	Revdar	Sirohi	Rajasthan	1	24	Motoda	Sabarkantha	Gujarat	1
25	Dantraï (母村)	Sirohi	Rajasthan		25	Kheroj	Sabarkantha	Gujarat	1
					26	Ambaji	Sabarkantha	Gujarat	1
					27	Shiyava	Sirohi	Rajasthan	1
					28	Abu Road	Sirohi	Rajasthan	1
					29	Sarupganj	Sirohi	Rajasthan	2
					30	Nitoda	Sirohi	Rajasthan	1
					31	Isla (母村)	Sirohi	Rajasthan	

(注) 契約村から母村に戻るまでの間に立ち寄った町村名およびその県名、州名を大まかな滞在日数とともに示した。

(出所) Manav Kalyan Trust と共同で作成

10キロほどの地点（そこまでがトライブ地帯である）まで続く。家畜はラージャスターンと北グジャラートを結ぶこの国道を通過して移動する。日中は巡礼者を乗せた車両や運搬トラックの往来があるが、夜は交通量が激減する。この下りの間に6回ほど、道路脇の空きスペースで野営を行わなければならない。この丘陵地帯とりわけ道路脇には放牧できる草地はない。それだけでなく、家畜の盗難や強盗が頻発する地域である。家畜は空腹状態で、移牧者は盗難に警戒し強盗に怯えながら、できるだけ早急にトライブ地域を抜けようとする。トライブ地域に入る地点で、たくさんの移牧集団が集結し、大集団で行動するのも、この危険に対応するためである。とくに、野営の際には家畜回りの四方を男どもが共同で固め、交代で寝ずの番をする。トライブ地域を過ぎると景観も一変する。丘陵が消え、集落があちこちに見えてくる。移牧者がほっと胸をなで下ろす瞬間である。それから2日ほどで、ケードブラフマーからイダル側を抜け、契約したマニヨール村に入る。

マニヨール村には11月末から5月中旬まで5カ月滞在した。契約村での移牧生活の詳細は次節で詳述する。ここでは、その後の経路の説明を続ける。

マニヨール村を出てからの移動経路は表1に示したとおりである。母村のダントライー村には7月下旬に戻った、それまでの3カ月間はグジャラート州の3つの県の村々を移動し、移牧を続けた。表には各村での滞在日数も記載している。契約村以降のルートはあらかじめ決められていたわけではない。過去のグジャラートにおける移牧の経験から、移牧者はグジャラート北部と中央部の作物構成、灌漑事情、土地所有状況、農民カーストと彼らの気質、放牧地、在地の牧畜カーストの規模と性質について一定の情報をもっている。また、過去に様々なコースをたどっているため、具体的な選択肢をいくつかもっている。ただし、これだけでは十分ではない。移動先の村で移動した日に放牧に開放される収穫後（できれば収穫直後）の圃場があるかどうか問題なので、結局その都度、開放圃場についての生きた情報を収集しなければならない。この情報収集と移牧ルートの決定が、移牧期間におけるリーダーのもっとも重要な任務となる。

マニヨール組のリーダーはサーバルカントー県の西部から隣接するメーヘサーナー県北部の1村を経由してバナースカントー県北部で長期間移牧する選択を行った。メーヘサーナー県とバナースカントー県はともに集約的農業が展開する地域で、グジャラート州内でもっともミルクの集荷量の多い地域でもある。バナースカントー県内のディーサーチョークディー（Disachokdi）では安定的に放牧することができたので、25日間の長期にわたって滞在した。最終的には、7月下旬に往路とは異なりカパシヤー（Kapasija）からアブロード（Abu Road）に抜ける国道から自村に戻った。

ウメードガド組のなかの3世帯も11月中旬と一緒にイスラー村を出発した。この移牧集団も契約村のウメードガド村に到着するまで13日を要している。途中、アンバージーで数年来ここに居住しているイスラー村出身の親族2世帯と合流した。他の移牧集団と大きなグループを組み、アンバージーからイダルに向けての国道を南下した。移動の情景はマニヨール組のものと同様なので、ここでは説明を割愛する。

ウメードガド組も十数年来、ウメードガド村に滞在した後、グジャラート州内での移牧を続け、

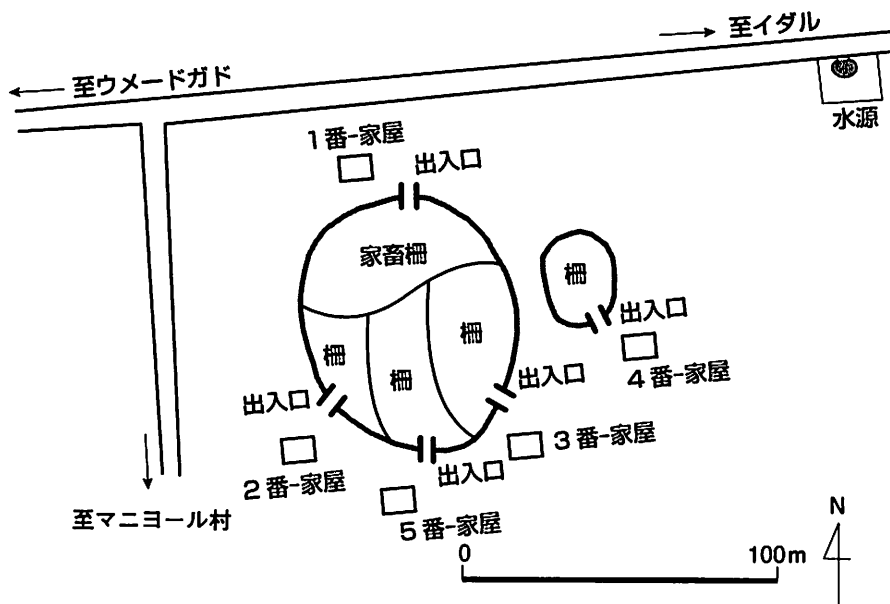
雨期にイースラー村に戻る移動パターンを繰り返してきた。今回は、ウメードガド村に5月初旬まで滞在した後、サーバルカウンター県内を周遊するルートを選択した。アミーンプル (Aminpur) では開放圃場によくアクセスできたので1カ月間ほど長期滞在した。サーバルカウンター内の非トライブ地域を一巡し、再びイダルに戻り、それから国道を北上してケードブラフマー、アンバージーを経由して8月初旬に自村のイースラーに戻った。

3. 契約村での牧畜生活

(1) 野営地での住居と家畜施設

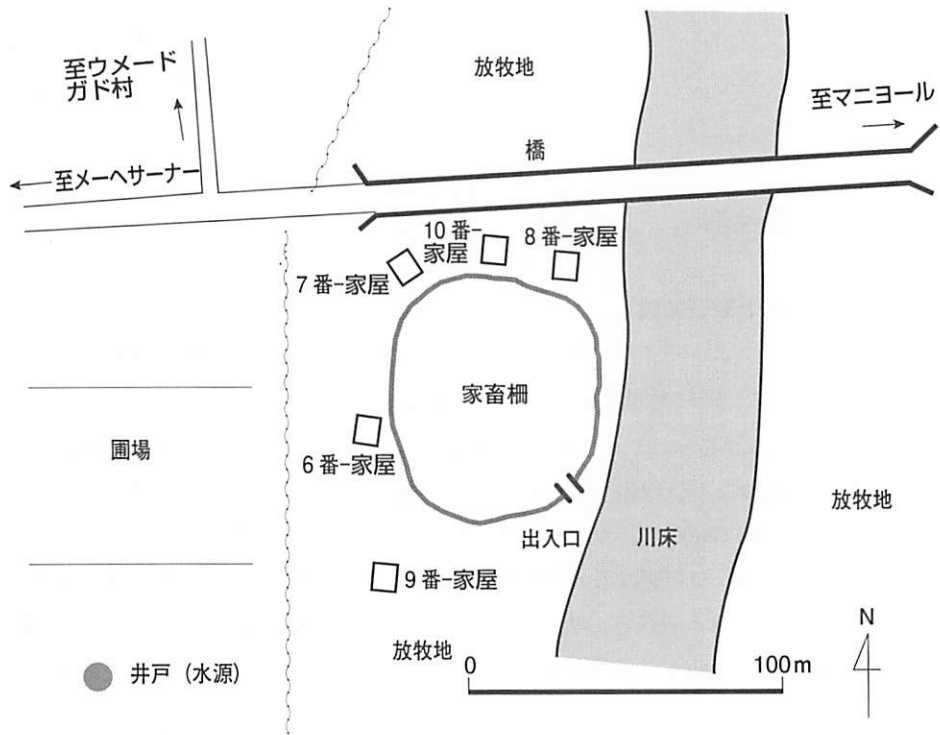
図3にみるように、マニヨール村では州道沿いの一農民所有の農地の一角に野営が許された。この農地は非灌漑地なので、野営期間となる冬季と夏季に作付けは行われない。ウメードガド村では、図4にみるように、州道沿いの放牧地の一角に野営した。橋のためとですぐ側は小河川であるが、野営期間には一切水流はなく、河床は家畜の移動路となっていた。マニヨール村では家畜を入れる柵は家族ごとに区切られていたが、ウメードガド村では共通の柵を使用した。住居はマニヨール村では各家族の家畜柵の出入口の側に設置された。ウメードガド村では河床の反対側にほぼ等間隔に住居が設置された。住居は6畳ほどの広さの平屋で、つくりは両組で共通している (写真3)。柱には細めの枝を使用し、側面と上部は芝とわらでふき、床には牛糞を塗り、かまどを備えている。

図3 野営地での住居と家畜施設 [マニヨール村]



(出所) 筆者作成

図4 野営地での住居と家畜施設 [ウメードガド村]



(出所) 筆者作成

食器類は側面の芝に挟んだりかけたりしている(写真4)。野営期間は降雨がないので、夜は基本的に外で薄手の敷布団の上で寝る。コット(軽い寝台架)は移動時の運搬がたいへんなので、持参しない世帯もある。

衣類、食器類などの日用品やミルク容器などを母村からロバの背に載せ運搬する。契約村に到着後、すぐに地元で枝、芝、わらなどを入手し、数日で住居と家畜柵を組み立てる。

野営地は両組ともに、(1) 州道沿いでアクセスが容易な地点、(2) 水源に近い地点、(3) 見晴らしがよく安全が確保しやすい地点、に設置されている。アクセスの容易さは、自分たちの市場その他への移動に便が良いだけでなく、民間ミルク業者など畜産品購入者の往来をも容易にする利点がある。飲料水と家畜の水場が近くにあることも野営地選定の重要な要件になる。ちなみに、両組ともに野営地から200メートルほどのところにある公共水源(マニヨール村)や農民の井戸(ウメードガド村)が使用できた。契約村での滞在は、他の移牧先での野営よりも安全であるが、それでも安全確保への配慮がみられる。

(2) 移牧集団の構成

ラージャスターンのダートライー村からマニヨール村に来た5家族のうち、3家族は兄弟関係

にあり、他の2家族も親族である。この10年間はほぼ同じ家族間でグループを形成してきたので気ころも知れている。イスラー村からウメードガド村にきた5家族もみな親族であるが、表2の世帯番号9番と10番の家族は3年前からグジャラートのアンバージーに居住している。そこで

表2 移牧集団の世帯別家族構成

契約村	世帯番号	移牧に参加した家族											母村に残った家族			雌牛数	雄牛数
		世帯員数	成人男子数	成人女子数	男子子供数	女子子供数	男子労働者数	男子補助労働者数	女子労働者数	女子補助労働者数	識字者数	リーダー	世帯員数	識字者数	教育年数(学年)		
マニヨール	1	6	4	2	0	0	4	0	2	0	0	主	3	1	12	100	0
	2	3	1	1	1	0	1	0	1	0	0		0	0		30	0
	3	3	2	1	0	0	2	0	1	0	0	副	0	0		100	0
	4	3	1	1	1	0	1	1	1	0	0		0	0		40	3
	5	5	1	1	1	2	1	1	1	1	0		0	0		60	0
小計		20	9	6	3	2	9	2	6	1	0		3	1	12	330	3
ウメードガド	6	5	1	1	2	1	1	0	1	1	0		1	1	12	40	2
	7	4	1	1	1	1	1	0	1	1	0		0	0		45	2
	8	4	1	1	1	1	1	0	2	0	0	主	2	2	2.5	50	0
	9	2	1	1	0	0	1	0	1	0	0	副	0	0		40	1
	10	4	2	1	1	0	3	0	1	0	0		1	1	5	60	1
小計		19	6	5	5	3	7	0	6	2	0		4	4	17	235	6
計		39	15	11	8	5	16	2	12	3	0		7	5	29	565	9

(注) リーダーの欄には、リーダーを出している世帯には「主」、サブリーダーの世帯には「副」と表示した。
(出所) 筆者の移牧集団調査(2009～2010年)

他の3家族と合流し、契約村にやってきた。

季節移牧集団は個別家族の集合であると同時に、集団全体としての利害を共有する組織でもある。両者が具体的にどのように関わっているのかを、表に基づき、検討しておこう。まず、個別家族として自ら所有する家畜の放牧や世話をする労働力を確保しておく必要がある。全サンプル世帯に共通する家族労働力構成の特徴は、(1) 成人男子と成人女子がともに1名以上存在していること、(2) 所有する牛頭数と家族労働力とりわけ成人男子労働力数が大まかに相関していることにある。成人男子は放牧を行う。成人女子は家事一般に加え、停泊地での家畜の世話、既肥の収集、日用品の買い出しなどを行う。両者が揃わなければ、自己の所有する家畜の管理と移牧生活を維持することはむずかしい。サンプル世帯の場合は、1番を除くすべての世帯が成人の夫婦を柱とする核家族である。1番世帯は老夫婦(夫70歳、妻68歳)と息子夫婦1組、既婚の息子1人(妻はラージャスターンの村に残る)と未婚の息子1人で構成される合同家族である。

移牧に参加する家族内の成人は、サンプル世帯の場合、例外なく放牧労働あるいは家畜の世話や家事労働に関わっていた。移牧に対応できる体力と体調を維持し、労働に貢献できなければ、移牧するその家族にとって、また移牧集団にとって、大きな負担になるので参加しないことになる。ちなみに、サンプル世帯のなかで最長老である1番世帯の70歳の老人も、子牛の世話をしたり、近

隣村民との折衝や交流に参加していた。68歳の妻は、まったくの現役で、家畜の世話や家事労働をこなしていたが、体力を要する厩肥の収集だけは息子の嫁に任せていた。

便宜上20歳以上を成人とみなしたが、それ以下の年齢であっても、労働に参加している。男子だと15歳を過ぎれば放牧労働ができるし、女子だと10歳を過ぎれば、家事や家畜の世話で頼りになる補助労働者となる。表に見るように、10番の世帯では、15歳の男子は一人前の放牧者として仕事をしていた。4番の10歳の男子と5番の15歳の男子は、放牧の補助者として働いていた。女子では5番の9歳、6番の8歳、7番の10歳の子供たちが、家事労働や家畜世話の補助労働を行っていた。さらに、より年少の子供たちの面倒をみるのも彼女らの役割であった(写真5)。

労働に全く参加しない子供たちは男子4名、女子2名の計6名である。すべて7歳以下の子供たちである。6番世帯には1歳の女子乳児、8番世帯には1歳の男子乳児が含まれている。移牧の厳しい環境のなかで、乳児を育てるのはたいへんである。

サンプル世帯のうち4世帯は、ラージャスターンの村に一部の家族を残して、移牧に来ていた。1番世帯では、3名の家族が残った。息子夫婦1組と移牧に単身参加した息子の嫁が1名の計3名である。残った息子は身障者で12学年を修了後、村で野菜雑貨を販売する商店を運営している。6番世帯では17歳の息子が就学のために村に残った。12学年で就学中である。8番世帯では6歳と12歳の息子が、各々2学年と5学年で就学している。10番世帯では11歳の息子が5学年で就学するために村に残った。6番、8番、10番世帯の子供たちは単身村に残ったので、食事その他の世話は村の親族にみてもらっている。

サンプル世帯のなかの識字者は、ラージャスターンの村に残った家族成員のなかの5名だけである。グジャラートに移牧に来ている家族成員は全員非識字者である。識字者は全員男子で女子はいない。女子の就学に対する厳しい状況があらわれている。

まだ男子に限定されているものの、就学の普及は、将来、就学者だけではなく、コミュニティ全体の生計や生活のパターンに大きな影響を与える可能性がある。すでに、現在においても、就学させるために子供と離れて生活し、かつ後の「消費支出」のところで詳述するが、そのための支出負担も行っている。

移牧地での実質的な家族労働力の規模は、表中の「男子労働者数」に「女子労働者数」を加えて評価するのがよい。家族労働力の規模は、所有する牛頭数と相関しており、家族労働力の規模の大きい1番、3番、10番世帯がより多数の牛を移牧に連れてきている。

移牧集団のリーダーとサブリーダーは出発前に移牧に参加する家族間で決められる。移牧生活には安全確保、飼料確保などの面で大きなリスクがあり、リーダーには情報収集力、交渉力、紛争解決力が求められる。移牧集団の死活を握る重要な役割なので、責任は重い。サブリーダーの役割はリーダーと協議し補佐することにある。マニョール組では所有家畜数の多い1番の長男(35歳)がリーダーを、3番の家長(55歳)がサブリーダーを務めた。1番世帯のなかでは本来は家長(70歳)がリーダーを果すべきであるが、日々、情報収集や交渉に走り回らねばならない激務なので、他の家族の了承のうえ、長男が務めた。ウメードガド組での所有家畜数の相違はそれほど大きくは

ない。8番の家長（50歳）がリーダーを、9番の家長（30歳）がサブリーダーを務めた。

次に、移牧集団全体としての家族成員数、家族労働力数、家畜数などを表3に基づき、検討しよう。移牧する集団の家畜種類と家畜数は家族労働力と移牧先での飼料基盤（主に収穫後の圃場と、放牧地などの共有地）の規模に対応していなければならない。移牧先で購入飼料や濃厚飼料を投与することもあるが、基本的に放牧に依存している点に彼らの移牧の大きな特徴がある。家畜数の移

表3 移牧集団の契約村別家族構成の特徴

契約村		世帯員数	成人男子数	成人女子数	男子子供数	女子子供数	男子労働者数	男子補助労働者数	女子労働者数	女子補助労働者数	歳字者数
マニヨール	平均値	4.00	1.80	1.20	0.60	0.40	1.80	0.40	1.20	0.20	0.00
	度数	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5
	標準偏差	1.414	1.304	0.447	0.548	0.894	1.304	0.548	0.447	0.447	0.000
	小計	20	9	6	3	2	9	2	6	1	0
ウメードガド	平均値	3.80	1.20	1.00	1.00	0.60	1.40	0.00	1.20	0.40	0.00
	度数	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5
	標準偏差	1.095	0.447	0.000	0.707	0.548	0.894	0.000	0.447	0.548	0.000
	小計	19	6	5	5	3	7	0	6	2	0
計	平均値	3.90	1.50	1.10	0.80	0.50	1.60	0.20	1.20	0.30	0.00
	度数	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
	標準偏差	1.197	0.972	0.316	0.632	0.707	1.075	0.422	0.422	0.483	0.000
	計	39	15	11	8	5	16	2	12	3	0

(出所) 筆者の移牧集団調査 (2009～2010年)

移牧集団全体としての規模については次節で触れるので、ここでは労働力について検討する。

昨年11月から4月までマニヨール村に停泊した牛の移牧者は5家族20人、ウメードガド村に停泊した移牧者は5家族19人であった。移牧の放牧労働や安全確保・紛争処理の面で重要なのは成人男子数で、マニヨール組が9名、ウメードガド組が6名であった。ウメードガド村には表中の5家族の他に、さらにラージャスターンの同じ村からやってきた2世帯の羊飼養者が停泊していた。牛の移牧調査なので、羊飼養者はサンプルに含めていないが、彼らは2世帯合わせて300頭の羊を飼養していた。この2世帯には2名の成人男子がいたので、ウメードガドに停泊した移牧集団の成人男子数は8名であった。成人男子数は家畜頭数と関わりと同時に、安全確保の面から移牧先でのトラブルに機動的に対応できる最低限の人数が必要である。この両集団の成人男子数も移牧開始前に参加家族により吟味されたものである。ちなみに、各移牧集団の世帯当たりの平均成人男子数をみると、マニヨール組は1.8人、ウメードガド組は1.2人となっている。成人女子数は、1世帯1名のケースが大半なので、世帯当たりの平均数は成人男子数のそれよりも若干小さい。

前表で検討したように、年齢が20歳未満であっても、一人前に放牧や家事・家畜世話のできる家族成員がいるので、男子労働者数は両組合わせて16名、女子労働者数は12名になっている。8～15歳の年齢層の子供たちは男女ともに補助労働力として貢献している。移牧集団のなかに労働のできない成人は含まれていないし、労働をしない7歳以下の子供たちも6名と僅少である。

(3) 男女別の労働パターン

1) 男子労働

停泊村での男子の主要な労働は、搾乳と放牧である。両組の労働内容に違いはないので、一般的な労働日の仕事内容を以下に示す。朝は5時半頃、起床する。排便など済ませてから、茶を飲む。7時頃から搾乳を始める。ひとは子牛を押さえ、もうひとりが雌牛の後肢をひもで軽く結わえ、搾乳を行う。1頭に10分ほど時間がかかる。各家族は10～15頭ほどの授乳中の雌牛や雌水牛がいるので、1時間から1時間半の時間を要する。夕方にも搾乳を行うが、朝のほうが搾乳量が多い。9時頃、朝食を食べる。小麦やトウジンビエのロートロー(Lotlo:厚焼きパン)とミルクで済ませる。10時頃、各家族は自分たちの家畜柵を開ける(写真6)。腹をすかせた雌牛、雌水牛は10分もしない内に柵の外に出て来る。搾乳と食事の準備は、家族ごとに行われるが、放牧は共同で行われる。

その際、家畜は(1)雌牛(3歳以上の成牛)、(2)雌水牛(3歳以上の成水牛)、(3)1～2歳の子牛・子水牛(雌雄とも)、(4)1歳未満の子牛・子水牛(雌雄とも)の4つのグループに分けられる。このうち、1歳未満の子牛・子水牛は放牧を行わないので、各家族の柵の中に残る(写真7)。残りの3グループは別々に放牧に出発する。雌水牛と雌牛のグループが別なのは、雌水牛の移動速度が雌牛よりも遅いためである。1～2歳の子牛・子水牛のグループを別にするのは、雌牛よりも歩く速度が遅いことに加え、一緒にすると子牛が雌牛の乳を飲んでしまうからである。グループ分けと別ルートでの放牧は、特定の圃場に放牧が集中することを防ぎ、グループ全体の家畜の飼料摂取量をできるだけ大きくする効果がある。ただし、グループごとのコース(圃場)選択には経済的な論理が働いており、授乳中の雌牛や雌水牛は飼料価値の大きい圃場で放牧している(写真8)。放牧労働については、グループごとに成人男子と補助の男子が数名随伴できるように調整が行われるが、たとえば、水牛をたくさん所有している家族の男子は水牛を放牧するなど一定の配慮が行われる。

放牧のコースは、リーダーの指示に従う。リーダーは毎朝7時には村民が集う箇所(村の出入り口など)に出かけ、当日や翌日の開放圃場についての情報を収集する。この情報に基づき、各グループのルートをおおまかに定める。ただし、朝に情報が得られない場合もある。その際には、3年前ほどから移牧集団が使い始めた携帯電話で最新の情報を伝える。

午後1～2時ころ、昼食を食べる。放牧に出る際に、昼食、粗糖、砂糖、茶葉少々を小さな布に包み、家畜を扱う棒やステンレス製の水入れとともに持参する。昼食はギー(Ghee:無水バター)を塗ったロートロー1枚に粗糖などシンプルである。時に玉ねぎなどつくことはあるが、野菜カレーは持参しない。

午後3時頃、家畜を村の水飲み場に連れてゆき水を飲ませる(写真9)。その後のゆったりとした時間帯に茶を飲む。その辺にある石を積み、小枝を拾い、持参したステンレス製の壺で自ら茶をつくり、葉を丸めたカップで飲む。

午後5時、野営地に戻り家畜を柵のなかに入れる。授乳中の雌牛と雌水牛に濃厚飼料を与える。

投与量は授乳量などにしたが、家畜ごとに異なる。5時半頃、夕方の搾乳を行う。子牛に乳を飲ませる。搾乳を終えるのは6時半頃になる。それからしばし放牧で疲れた体を休める。立毛中の圃場に入らぬように、常に家畜を管理し、家畜とともに行動しなければならないので、放牧は体力を消耗する重労働である。

夜8時頃、晩飯を食べる。ここでもロートローとギー、ミルクなどでまじめにジャガイモカレーなどを食べることもある。食後はくつろぐ。9時過ぎに、家畜柵の側で就寝する。

停泊村を離れ、母村に最終的に帰るまでの期間の労働パターンは、停泊村に滞在した時とは以下の点で異なる。第1は、家畜見回りの夜番が始まる点である。停泊村を離れた後は、家畜柵のないところで、夜間に家畜が回りにある立毛中の圃場に入らぬように、また盗難にあわぬように、交代で監視する。放牧をした男子は非常に疲れているので、先に休ませ、夜中の12時頃まで男子老人や女子成員が夜番を務める。それから成人男子が2時間おきに交代し家畜を監視する。ここでは5家族が家畜全体を取り囲むように等間隔に陣取る。寝付かず立ち上がる雌牛には、足を縄で結び立ち上がれないようにする。夜番は朝5時頃まで続く。第2は、搾乳が朝1回のみになる点である。授乳雌牛・雌水牛には引き続き濃厚飼料を投与するものの、放牧で摂取できる飼料は減少し、ミルク産出量も低下する。また、移動の先々で民間のミルク業者にミルクを集荷してもらわねばならず、この点でも夕方の搾乳は難しい。第3は、放牧のグループが、上記した4グループから、(1)雌牛・雌水牛、(2)子牛・子水牛の2つに分けられることである。この際、2歳の子牛は(1)のグループに入れられる。1歳未満の子牛・子水牛も日々移動しなければならない。

2) 女子労働

女子成員は朝5時に起床する。すぐに茶の準備をする。7時からの搾乳は時に手伝うことはあるが、この時間帯には朝食および放牧にでる男子成員のための昼食をつくる。朝食と昼食はともにロートローを主体とし、女子の昼食用に若干の野菜カレーをつくることもある。また、3日に一度ほど、自家消費用のギーをつくる作業もこの時間帯に行う。8時過ぎに、民間のミルク業者がミルクの集荷にやってくる。ミルクは女子成員が立ち会うなか、家族別に集荷されていた。10時過ぎに、家畜は柵を出て放牧に向かう。野営地に残った女子成員はすぐさま家畜柵内部に蓄積した家畜糞の回収を始める。柵内の地面を削り取るように、家畜糞を集め、それをタガーラー (Tagara: 円形の鉄製容器) に入れ、頭に載せて柵外の厩肥置場に積み上げる。この作業は家族ごとに各々の家畜柵内で行われる。雌牛数が100頭を超える家畜柵では、家畜糞を搬出するのに3時間ほど要していた。成人女子はタガーラーを2枚重ねて運ぶなど、体力のいる仕事である。小さな子供たちも見よう見まねで手伝う。週にトラクター2台分の厩肥が回収されていたので家畜糞はかなりの分量になった。厩肥はトラクター1台当たり800～1000ルピーで販売された。この収益は、所有家畜頭数に応じて分配された。午後1時、子牛・子水牛に水と餌(乾燥飼料)を与える。それから、女子成員と子供たちは昼食を食べる。ゆっくり休む暇もなく、すぐに女子成員は20リットル缶で水汲みを始める。水源は200メートル先で、1報復に約15分を要した。水汲みに1時間ほどかかっていた。洗濯は水源のある場所で行った。午後3時頃、濃厚飼料のひとつであるパーブディー (Papdi: 綿実を中

心とした配合飼料)に水を混ぜ、夕方の飼料投与に備える。夕方5時には家畜が放牧から戻ってくる。家畜を柵内に入れる手伝いをし、それから授乳中の雌牛・雌水牛に濃厚飼料を食べさせる。男子が搾乳している間、女子は茶の準備を始める。夕方7時過ぎに民間ミルク業者がミルク集荷にやってくるのに対応してから、晩飯(ロートローとミルク)の準備をする。8時、食事を食べさせ、それから後片づけを行う。子供を寝かしつけ、それから夜10時頃就寝する。女子も男子と同様に、外で寝る。

停泊村を離れてから母村に戻るまでの期間は、野営する村が日々変わるので厩肥回収は行わないけれども、男子の労働パターンの項目で述べたように、女子成員も家畜見回りの夜番に参加する。

(4) 牛構成の特徴

移牧集団が飼養する家畜は牛と水牛の2種類である。牛はシローヒー(Sirohi)と呼ばれる在来種である。ラージャスターン南部のシローヒー県が原産地である。ここはトライブ地域であり、森林地帯や起伏の激しい地域を移動できる特性をもった品種である。体躯は中型であり、乳役兼用として利用されるが、乳量にとくに秀でているわけではない。役畜としての評価は高くない。それにもかかわらず、移牧集団がシローヒーを飼養してきたのは、長距離の起伏の激しい地域での移動に対応できるとともに、耐乾性に優れているためである。すなわち、移牧に非常に適した特質のためである。水牛も地元産の中型種である。水牛を少数連れてきているのは、そのミルクがギー加工に適しているためである。彼らはかなりの量のギーをつくり自家消費している。

表4にみるように、マニヨール組の牛の総頭数は330頭、ウメードガド組は235頭である。移牧民はこれら停泊村の飼料基盤がどれほどのものであるのかを事前に承知している。マニヨール組は10数年来、ウメードガド組は5年来、同じ停泊村と契約をしているので、総頭数が極端に変動しないように、必要があれば移牧集団のなかで参加する世帯の入替えを行い、総頭数を調節する。彼らはラージャスターンに帰村するまで共同行動をとることが多いので、停泊村を出てから帰村するまでの3~4カ月、移牧を行うのに適した頭数であるのかも検討する。上記の頭数は、それらの検討を踏まえて調整された頭数とみなすことができる。

世帯の所有する牛の頭数を個別にみると、30頭から100頭までの幅がある。水牛の場合は、1頭から3頭までと、所有規模はきわめて小さい。牛については、マニヨール組の世帯当たり所有頭数は66頭とウメードガド組のそれを20頭弱上回っているが、水牛はウメードガド組の世帯でより一般的にみられる。

牛の雌雄別頭数とくに雄頭数については、マニヨール組の世帯から信頼できる回答を得ることができた。世帯別の平均値でみると、牛66頭のうち10頭余り、すなわち15%ほどが雄である。雄の年齢分布については質問していないが、2歳の雄を販売したケースが報告されているので、2歳が少数、残余が1歳以下の雄子牛だとみることができる。ウメードガド組からは、一部世帯から雄の頭数についての情報を得ることができなかったが、入手できた世帯の情報から、40~45頭のうち5~6頭が雄であることが確認できる。ここでも雄の比率は15%ほどである。

表4 移牧集団の世帯別牛構成とミルク産出

契約村	世帯番号	牛数	雌水牛数	雄牛数	雌牛数	授乳中頭数	授乳停止中頭数	妊娠中頭数	産後3カ月間(L)	次の3カ月間(L)	6カ月以降(L)	授乳月数(月)
マニヨール	1	100	0	10	90	12	58	20	5	4	3	7
	2	30	0	7	23				5	3	2	8
	3	100	0	20	80	15	35	30	4.5	3	1.5	8
	4	40	3	6	37	10	17	10	5	3.5	2	8
	5	60	0			10	30	20	4	3	2	8
小計		330	3	43	230	47	140	80	23.5	16.5	10.5	39
ウメードガド	6	40	2	6	36	10	15	17	4.5	3	1.5	7.5
	7	45	2	5	40	10	22	10	5	3	2	8
	8	50	0			13	29	8	3	2	1	7
	9	40	1	1	40	6	24	10	5	4	3	7
	10	60	1			9	36	5	4	3	1	7
小計		235	6	12	116	48	126	50	21.5	15	8.5	36.5
計		565	9	55	346	95	266	130	45	31.5	19	75.5

契約村	世帯番号	日当たり乳量(L)	乳価格(Rs)	販売乳量(L)	販売価格(Rs)	消費乳量(L)	消費価格(Rs)
マニヨール	1	55	825	53	780	2	30
	2	28	450	29	435	1	15
	3	65	1000	63	970	2	30
	4	45	650	43	620	2	30
	5	60	900	58	870	2	30
小計		253	3825	246	3675	9	135
ウメードガド	6	50	750	48	720	2	30
	7	60	800	58	770	2	30
	8	40	600	37	555	3	45
	9	30	450	28	420	2	30
	10	35	525	33	495	2	30
小計		215	3125	204	2960	11	165
計		468	6950	450	6635	20	300

(出所) 筆者の移牧集団調査 (2009～2010年)

雌牛については、授乳状況を授乳中、授乳停止中、妊娠中の3つに区分し、各々の頭数を尋ねた。その結果は、マニヨール組の場合は、授乳中18%、授乳停止中53%、妊娠中29%、ウメードガド組の場合は、授乳中22%、授乳停止中51%、妊娠中27%であった。ここでも成牛と子牛の区分が明確ではなく、とくに授乳停止中と報告された頭数のなかに、相当数の雌子牛(3歳未満)が含まれているものとおもわれる。

ミルクの産出量は調査日の前日の朝と晩に搾乳した収量である。ミルク収量は、雌牛数、授乳中雌牛数、妊娠中雌牛数と緩やかに相関している。マニヨール組の世帯当たりのミルク収量は50.6リットル、ウメードガド組では43リットルであった。

彼らの所有する雌牛について、授乳開始後最初の3カ月間、次の3カ月間、6カ月目以降の3つの期間について1日当たりの平均ミルク収量を尋ねた。マニヨール組の回答の平均は、3期間について各々4.7、3.3、2.1リットルで授乳期間は平均7.8カ月であった。ウメードガド組の場合は、4.3、3.0、1.7リットルで授乳期間は平均7.3カ月であった。

ミルク収量から自家消費分を除いた部分が販売される。停泊村およびサーバルカーンター一帯(ただし、トライブ地域は除く)にはミルク生産者協同組合が展開しているが、移牧集団は協同組合にミルクをおさめていない。協同組合でのミルクの集荷時間は朝は7時まで、夕方は7時15分までであるが、移牧集団の搾乳はこれらの時間までに終了しないこと、野営地から協同組合事務所までミルクを持ち込まなければならないこと、協同組合ではミルクの乳脂率の検査が厳しいことなどがその理由である(注18)。

このため、移牧集団は搾乳したミルクを民間のミルク業者に販売している。両村の移牧集団からミルクを購入する民間業者は、メーヘサーナー県のヴァドゥアゴール(Vaduagor)を拠点としており、毎朝そこからミルク運搬車両で集荷に来る。簡便な品質検査をするだけでミルクを引き取る。購入単価は1リットル15ルピーで、支払は10日ごとにまとめて行われる。数年来、同じミルク業者と取引をしている。停泊村を出て、グジャラート州内の他箇所を移牧する際にも、可能な限り、この民間業者がミルク集荷に訪れる(注19)。

調査前日における移牧集団別のミルクの販売総量と販売総額はマニヨール組が246リットルと3675ルピー、ウメードガド組が204リットルと2960ルピーであった。ミルクの販売が移牧集団のもっとも大きな収入源となっている。両移牧集団を合わせた世帯当たりの調査前日のミルク販売額は663ルピーだった。帰村するのは7～8月(雨期の状況により早めに十分な降雨があれば帰村は7月に、降雨が遅ければ8月にずれ込む)なので、グジャラートには8カ月ほど滞在することになる。ミルク収量は季節により大きく変動するが、日々の販売額を一律だと仮定すると、世帯当たり約16万ルピーの販売額に計算上はなる。

調査時点での家畜種類別頭数の他に、5年前の家畜種類別頭数の情報も収集したので、表5に掲げる。家畜種類については変動がなく、5年前においても牛と水牛のみであった。世帯別の両時点

表5 移牧集団の世帯別雌牛・雌水牛所有頭数の変動(2005年と2010年の頭数比較)

(頭数)

契約村	世帯番号	雌牛		子牛		雌水牛		子水牛	
		2005	2010	2005	2010	2005	2010	2005	2010
マニヨール	1	50	100	10	21	0	1	0	1
	2	25	30	8	9	0	0	0	0
	3	120	100	33	24	5	0	4	0
	4	0	40	0	14	0	3	0	1
	5	70	60	22	17	0	0	0	0
小計		265	330	73	85	5	4	4	2
ウメードガド	6	50	40	18	9	5	3	4	2
	7	50	45	14	11	5	2	5	2
	8	30	50	5	12	3	1	0	0
	9	50	40	12	8	5	1	3	1
	10	35	60	5	7	0	1	0	1
小計		215	235	54	47	18	8	12	6
計		480	565	127	132	23	12	16	8

(出所) 筆者の移牧集団調査(2009～2010年)

における家畜種類別頭数の変動は、2世帯を除き、それほど大きくはない。比較的大きく変動したのは、1番と4番の世帯である。1番は男子労働力の増加に合わせて家畜数を増やした経緯がある。4番は父親のもとで家畜の移牧を行っていたが、父親から独立した際に、自らの家畜の持ち分を手にした。

雌牛の頭数は、両移牧集団ともこの5年間に増加しているが、増加数は僅少である。子牛数についても全体での増加数は僅かである。むしろ、水牛頭数の変化の割合のほうが大きい。水牛の頭数は雌牛の20分の1(2005年)ほどなので、頭数の変動自体は雌牛に比べると小さい。しかし、全体で2005年の18頭から2010年の8頭への減少は、移牧の家畜種類別の頭数構成の大きな変化だと捉えることができる。水牛の頭数を減少させた世帯は、その理由として、水牛は移動速度が遅いので雌牛と一緒に移動させることが困難なこと、飼料を十分に供給できずミルク産量も少ないことをあげた(注20)。

(5) 家畜の移転

次に、表6に基づき、過去3年間の家畜の移動について検討してみよう。ここでの家畜の移動とは、販売、贈与、死亡(老齢、病気、事故)および盗難による家畜の転出・喪失を示す。これらの項目のなかでもっとも頻度が大きく、かつ移牧経営上重要なのは、家畜の販売である。家畜の販売収益は、ミルクの販売、厩肥の販売に次ぐ、3番目に重要な販売収益である。調査対象の移牧集団の家畜販売は雌牛と子牛について行われた。販売頭数、販売価格ともに雌牛が子牛を上回っている。1頭当たりの販売額は雌牛が2762ルピー、子牛が1888ルピーである。雌牛の1頭当たりの販売額は子牛のそれを上回っているが、僅かな差に過ぎない。この表には記載していないが、販売雌牛の年齢と販売理由についても情報を収集したので、必要に応じて補足しておく。

ちなみに、1番は3年前に年齢8歳ほどの4頭の雌牛を8000ルピーで、2年前には10歳ほどの

表6 移牧集団の世帯別過去3年間の家畜の移動

契約村	世帯番号	販売雌牛数	販売額(Rs)	販売子牛数	販売額(Rs)	贈与頭数	老死頭数	病死頭数	事故死頭数	盗難頭数
マニヨール	1	14	33000	3	6000	1	1	1	0	0
	2	1	2500	2	3000	0	0	0	0	1
	3	1	3000	0	0	0	2	0	0	1
	4	0	0	4	8000	0	3	0	0	0
	5	1	3500	0	0	0	0	2	0	0
小計		17	42000	9	17000	1	6	3	0	2
ウメードガド	6	1	3000	0	0	0	0	0	0	0
	7	1	5000	0	0	1	1	1	0	0
	8	2	9500	0	0	0	2	1	1	0
	9	2	6500	0	0	0	1	0	1	0
	10	1	3000	0	0	0	1	3	0	0
小計		7	27000	0	0	1	5	5	2	0
計		24	69000	9	17000	2	11	8	2	2

(出所) 筆者の移牧集団調査(2009～2010年)

雌牛10頭を25000ルピーでラージャスターンの母村のラバリーに販売した。販売代金はいずれも母村での飼料購入にあてた。昨年は2歳の雄子牛3頭を6000ルピーでグジャラートの農民に販売した。2番は3年前に13歳の雌牛1頭を2500ルピーでグジャラートの農民に販売した。2年前には2歳の雌子牛2頭を3000ルピーで、グジャラートの農民に販売した。3番は2年前に12歳の雌牛1頭を3000ルピーで停泊村近隣の村のパーティーダール農民に販売した。緊急に飼料を購入する必要があったためである。4番は昨年2歳の雌子牛4頭を8000ルピーでグジャラートの農民に販売した。5番は昨年、10歳の雌牛1頭を3500ルピーで停泊村の農民に販売した。緊急に飼料を購入する必要があったためである。6番も昨年、12歳の雌牛1頭を3000ルピーで停泊村近隣の村の農民に販売した。これも飼料不足に対処するためである。7番は2年前に10歳の雌牛1頭をグジャラートの農民に5000ルピーで販売し、それを飼料購入資金としている。8番は3年前に9歳の雌牛1頭を4500ルピーで停泊村のパーティーダール農民に販売した。この資金で粗飼料(モロコシ)を購入した。2年前には7歳の雌牛1頭を5000ルピーでグジャラートの農民に販売した。9番は3年前に9歳の雌牛1頭を3500ルピーで、2年前には12歳の雌牛1頭を3000ルピーで停泊村隣村の農民に販売し、飼料を購入した。10番は2年前に12歳の雌牛1頭を3000ルピーで停泊村隣村のパーティーダール農民に販売し、粗飼料を購入した。

以上の具体例から、(1) すべてのサンプル世帯で雌牛あるいは子牛の販売を行っていること、(2) 母村だけではなくグジャラートの停泊村およびその近隣の村でも販売が行われていること、(3) 緊急に資金が必要になった際に販売されていること、(4) 販売資金はほぼ例外なく飼料購入に充てられていることが確認できる。とくに、移牧の際に多額の現金を持ち歩くわけにはいかないので、「動く財産」「緊急な換金が可能な財産」として、牛は資金の必要な際に移牧先で販売されている。牛の販売代金だけではなくミルクの販売代金も飼料の購入に充てられている。このように、移牧先での家畜販売は彼らの資金繰りと密接に関わっており、移牧生活に不可欠な経済活動になっている。ただし、雌牛や子牛を何時どれだけ販売するかは、彼らの必要と関わるだけではなく、どれほどの需要があるのかに左右される。需要の動向については、トラクター化や機械化が進行するなか、雄子牛への需要が減退していることが指摘されている。とくに、シローヒーは役畜としての評価は低いのでなおさらである。雌牛と雌子牛については今のところ需要はあるが、よりミルクの収量の大きい品種(HFや在来種のなかではカンクレージ種やギール種)や乳脂率が高く乳価の高い水牛への切り替えがグジャラートの平原部では進行しており、調査対象地域のような周縁部にもその変化が及び始めている。このような事情から、移牧先における雌牛と子牛の販売がこの先どれだけの期間継続できるのかは不透明である。

贈与は2件、報告されている。ひとつは、1番が2年前に10歳の雌牛1頭を母村のバラモン(ヒンドゥー寺院の司祭者)に対して、ホーリー祭(Holi:春祭り)の際に喜捨した事例である。もうひとつは、7番が3年前に8歳の雌牛1頭(回答者によると4000ルピー相当の価値のある雌牛)を母村のバラモンに喜捨した事例である。2例ともに母村での喜捨であり、移牧先での贈与や喜捨は報告されていない。

死亡数は、老衰、病気、事故の3原因に区分した。老死が11例、病死が8例、事故死が2例報告されている。老死による死亡の年齢分布は、13歳（3頭）、14歳（1頭）、15歳（5頭）、16歳（2頭）となっている。すべて13歳以上である。

病死による死亡の年齢分布は、1歳（1頭）、8歳（1頭）、9歳（1頭）、10歳（3頭）、12歳（2頭）と報告されている。ほとんどの回答者は成牛のなかでの病死頭数を回答したが、1例だけ子牛の死亡例についての回答があった。実際には、子牛の病死例は多数あるものとおもわれる。

事故死の2例はともに公道を移動中にトラックにはねられたものである。2年前に10歳の雌牛1頭が、昨年は8歳の雌牛1頭が事故で死んでいる。母村からグジャラートの停泊村への移動、停泊村から帰村するまでの村々を介しての移動は、国道、州道などの公道を使って行われるために、家畜が交通事故に巻き込まれるケースが絶えない^(注21)。

盗難による被害が2件報告されている。3年前に8歳の雌牛が1頭、2年前には10歳の雌牛が1頭、盗難の被害にあった。いずれも、ラージャスターンから国道を経由しグジャラートのトライブ地域を通過する際に生じた。人気の少ない、起伏の激しい難所を無事に通過するために、移牧集団はいくつかまとまって移動する。それでも、トライブによる家畜の窃盗は絶えない。

(6) 購入飼料

移牧集団のもっとも大きな支出項目は飼料購入費である。移牧集団の契約村への支払も飼料基盤の確保という点で飼料のための支出とみなすことができるが、ここではそれとは別の粗飼料や濃厚飼料の購入について検討する。表7にみるように、購入飼料は粗飼料（モロコシ）と濃厚飼料（サーバルダーンと綿実配合飼料）に大きく2分できる。

モロコシは西インドの代表的な粗飼料のひとつである。穀実を収穫できるとともに、その茎葉は乾燥粗飼料として利用される。緑の状態で、緑飼料として利用することもある。マニョール組は世

表7 移牧集団の世帯別飼料支出

契約村	世帯番号	モロコシ茎葉		サーバルダーン		綿実配合飼料		計 (Rs)
		束	(Rs)	袋(50kg)	(Rs)	袋(50kg)	(Rs)	
マニョール	1	1300	13000	50	35000	20	12000	60000
	2	500	7000	0	0	45	25000	32000
	3	800	8000	0	0	50	30000	38000
	4	600	7000	0	0	40	24000	31000
	5	700	8000	0	0	45	27000	35000
小計		3900	43000	50	35000	200	118000	196000
ウメードガド	6	500	6000	0	0	40	24000	30000
	7	700	7000	0	0	60	35000	42000
	8	500	5000	0	0	50	30000	35000
	9	1000	10000	20	14000	50	3500	27500
	10	800	8000	0	0	50	30000	38000
小計		3500	36000	20	14000	250	122500	172500
計		7400	79000	70	49000	450	240500	368500

(出所) 筆者の移牧集団調査(2009～2010年)

帯当たり 9333 ルピー、ウメードガド組は世帯当たり 7600 ルピー余りのモロコシ飼料を購入した。当地ではモロコシを束にして販売しており、前者は 866 束、後者は 750 束にあたる。モロコシは出産直後あるいは病気のため放牧に出ない雌牛や家畜柵のなかで過ごす子牛に与えられる。産後には 1 日 5 束、病気の雌牛には 2 束、10～15 頭の子牛には合わせて 5～6 束ほどが与えられる。乾燥モロコシは補助飼料として、放牧が行えない時、放牧地の飼料が乏しい時などに必要最低量が投与される。

濃厚飼料として近年集中的に使われているのが、綿実配合飼料とサーバルダーン (Sabardhan) である。綿実 (綿花の種を煮詰めた濃厚飼料) はグジャラートでよく使われる濃厚飼料である。サーバルダーンはサーバルカーンターの酪農組合が製造している濃厚配合飼料で、ミルク収量の増加と品質の向上に即効性の効果をもつ。しかし、綿実配合飼料よりも若干高価なので、移牧世帯の多くは、綿実配合飼料を主に使用した。

この他に、1 番は綿実を授乳中の雌牛に対して、授乳を開始してからの上記 3 時期に対応して、各々 2 キロ、1.5 キロ、1 キロ投与した。2 番はトウモロコシも粗飼料として与えた。

このように、モロコシと綿実配合飼料やサーバルダーンの他にも飼料は投与されたが、舎飼いの場合と比べ、与えられる飼料の種類は非常に少ない。世帯当たりの飼料購入額 (これら 2 種類の飼料の合計) はマニヨール組が 39200 ルピー、ウメードガド組が 34500 ルピーであった。これは移牧期間についてのみの購入額である。

(7) 食料支出

移牧集団の食料支出について検討しておこう。昨年度の食料支出についての簡易調査結果を表 8 に示す。表には、穀物、豆類、油、野菜、ミルク、ミルク加工品、砂糖類、菓子類の項目を掲げた。

表 8 移牧集団の世帯別食料支出

													(Rs.)
契約村	世帯番号	小麦	トウジンビエ	樹豆	緑豆	マスタード油	野菜	ミルク	ギー	砂糖	粗糖	菓子	計
マニヨール	1	4700	200	200	500	750	600	10800	2800	1150	850	80	22630
	2	4500	500	210	450	700	300	5400	1500	950	450	70	15030
	3	4500	550	200	480	1000	400	10800	1800	1100	700	110	21640
	4	3000	400	550	400	525	750	10800	1500	1500	400	100	19925
	5	5000	100	850	500	600	700	10800	1500	1300	700	110	22160
小計		21700	1750	2010	2330	3575	2750	48600	9100	6000	3100	470	101385
ウメードガド	6	5000	100	350	250	650	300	10800	2500	1000	1550	100	22600
	7	3500	500	700	300	550	200	10800	1500	800	400	90	19340
	8	4000	500	370	350	550	700	16200	2000	1050	500	100	26320
	9	4500	700	250	150	500	175	10800	1700	2000	550	100	21425
	10	4000	500	400	350	500	250	10800	1000	1000	1500	100	20400
小計		21000	2300	2070	1400	2750	1625	59400	8700	5850	4500	490	110085
計		42700	4050	4080	3730	6325	4375	108000	17800	11850	7600	960	211470
比率 (%)		20.2	1.9	1.9	1.8	3	2.1	51.1	8.4	5.6	3.6	0.5	100

(出所) 筆者の移牧集団調査 (2009～2010 年)

この表からは塩、茶葉やその他のマイナーな支出項目は除外してある。食料支出構造の特徴を大掴みに把握するのが目的である。また、本表には購入の必要のない自家生産の食料品目も含まれている。ミルクとミルク加工物のギーがそれである。これらの食料品の価格は、ミルクの場合はミルク業者への販売価格、ギーの場合は市場価格を適用し計算をした。

個別品目の支出額について若干の世帯差はあるが、食料支出のパターンは共通している。マニョール組とウメードガド組に分けて検討する必要がないので、全体の動向を食料支出総計に対する各食料品目の比率の分布を中心にみてみよう。移牧集団の食料支出の特徴がもっとも明確にあらわれているのは、ミルクとギーの支出比率が非常に大きいことである。他の食料品の消費支出額が非常に小さいために、ミルクとギーの消費支出の割合が大きくあらわれている側面のあることについては後述する。それにしても、ミルクが51%、ギーが8%余りなので、両者を合わせると60%弱にもなる。ここに、ミルクを『食べて』生活をしている彼らの食生活の特徴が端的にあらわれている(写真10)。ミルクの自家消費量については、これでも過少報告の可能性がある。ミルクの価格評価にあたってはグジャラートにおけるミルクの民間業者への販売価格である1リットル当たり15ルピーを適用し、加工乳の市場価格(1リットル20ルピー)を適用していない。それでも、これだけの比率になる。ちなみに、移牧集団全体の1人当たりのミルクの年間消費額は2769ルピーとなる。1リットル当たり15ルピーとして1人当たりの年間消費量に換算すると、185リットルになる。1日当たりでは506ミリリットルとなる。

ギーは自家消費分のミルクから週に2~3回、各回100~200ミリリットル製造している。ギーは日々食品として消費する。祭の際や急な来客があるような時には、市場から購入することもある。ただし、購入分については別途情報を収集していない。

移牧集団の主食は小麦とトウジンビエ(モロコシとともに、西インドで広く栽培されているミレットで、穀実を製粉し厚焼きパン(ロートロー)として消費されている)の2種類である。トウジンビエは冬場の寒い季節にとくに愛好されている。

もうひとつ、移牧集団の食生活の特徴があらわれているのが、砂糖類の消費支出の多さである。砂糖が5.1%、粗糖(Gul:グル:精製前の砂糖で、ミネラルを大量に含んでいる)が3.6%で、合わせると9%弱にもなる。砂糖はミルクに混ぜたり、茶(ミルクティー)に使用する。砂糖入りのミルクは食事につきものの品目のひとつである。茶は朝夕、そして放牧の休憩時につくる。また、来客があれば、茶をつくるので、砂糖の消費量は多い。粗糖は食事の品目の一つとして日常的に消費されている。粗糖は何も手を加えず、そのまま粗糖としてロートローとともに消費する。ロートローを手でもみ千切り、粗糖と混ぜ、それにギーをかけて食べることもある。粗糖は常に放牧に持参し、食事の際や疲れを感じた時に摂取する。疲労回復に即効性がある。子供たちのおやつも粗糖である。グジャラートやラージャスターンの農村部では粗糖は食事の際などによく消費されているが、移牧集団の粗糖の摂取量の多さは抜きん出ている。厳しい放牧や移動生活に適應するために必要とされる食料品である。

豆類はもっとも一般的なたんぱく源として、都市農村を問わず、広く消費されている。消費する

豆類の種類も豊富である。移牧集団も豆類は消費するが、その重要性は一般の世帯ほど大きくはない。一般の世帯と異なり、豆類は毎日消費されることはない。時折、少量ダール（ひき割り豆のカレースープ）をつくる程度である。豆類の種類は、樹豆（Toovar：トウアル豆）と緑豆（Moong：ムーング豆）の2種類が報告されている。

野菜も移牧集団のなかでは、2次的3次的な食品である。野菜カレーは来客があった際などに時折つくられるだけで、日常的に野菜が消費されることはない。このため、一般世帯では考えられないほど、野菜の世帯当たりの消費支出が小さくあらわれている。野菜の中では、比較的安価で日もちし、栄養分の豊富なじゃがいもとたまねぎが好まれている。

その他の品目には、マスタード油と菓子がある。グジャラートでは落花生油がひろく使われているが、移牧集団は調理用の油としてマスタード油を使用している。菓子もまれに消費されているが支出額は小さい。このように、ロートローとミルク、ギー、それに粗糖が食卓の主役であるため、他の豆類や野菜などの食品の消費額も消費支出比率も小さい。

最後に移牧集団全体の世帯当たり年間消費支出額をみておこう。ミルクとギーの自家消費分を含めた世帯当たり年間消費支出額は21147ルピーになる。今回の調査時点での移牧集団への参加人数は39名であったので、それで除すると一人当たりの食料支出額は5422ルピーになる。たいへん質素な生活である。消費した食品のうちミルクとギーは購入していないので、実際に購入した食品への支出額は、移牧集団全体で85760ルピー、世帯当たり平均では8576ルピーとなる。

(8) その他の支出

その他の支出項目として、衣類、靴類、修繕費、教育費、交通費のデータも入手したので、世帯当たりの支出額の分布を表9に示す。ここでもマニヨール組とウメードガド組の世帯間で支出パタ

表9 移牧集団における世帯別「その他項目」の支出

(Rs.)

契約村	世帯番号	衣類	靴類	修繕費	教育費	医療費	交通費	計
マニヨール	1	1500	1000	5000	0	1000	1500	10000
	2	1000	500	3000	0	500	1000	6000
	3	1200	750	3500	0	700	1500	7650
	4	1000	700	3000	0	500	1000	6200
	5	1500	1000	5000	0	600	1100	9200
小計		6200	3950	19500	0	3300	6100	39050
ウメードガド	6	2500	1500	5500	1000	700	2000	13200
	7	2000	1000	4500	0	500	1500	9500
	8	1000	1500	5000	1500	1000	1500	11500
	9	1500	1000	4000	0	600	2000	9100
	10	2000	1000	5000	2000	0	1500	11500
小計		9000	6000	24000	4500	2800	8500	54800
計		15200	9950	43500	4500	6100	14600	93850
比率 (%)		16.2	10.6	46.4	4.9	6.5	15.6	100

(出所) 筆者の移牧集団調査 (2009～2010年)

ーンに、教育費を除き、違いはほぼないので、両移牧集団全体の支出構造を中心に検討を行う。

その他の支出項目のなかでもっとも支出額が大きいのは「修繕費」である。修繕費には家屋の修理費と移牧期間の家屋の管理費の双方の支出が含まれている。移牧世帯は雨期を除く8カ月間ほどラージャスターンの村を離れることになるので、雨期に帰村した際に家屋の補修を行う。さらに、移牧期間中に家の管理や村に残った子供の面倒をみてもらった場合には、その支払も行う。いずれも移牧活動に付随する支出である。世帯当たりの支出額は4350ルピーで、その他の支出総額の46%を占めている。世帯間の修繕費支出額の散らばりは比較的小さい。

次に支出額が大きいのは衣類である。移牧集団は移牧の際にも伝統的な衣装やターバンを着用している。これらはグジャラートでも販売しており、必要が生じた際には、イダルにあるマーケットなどで購入する。靴も同様で、伝統的なデザインの靴を購入する。

教育費はウメードガド組の3世帯が支出していた。「家族構成」の節で触れたように、この3世帯の子供(6番1名、8番2名、10番1名)は村に残り、就学していた。教育費の内訳は文具や授業料などの出費であった。全世帯のその他の支出総額に占める教育費の比率は、教育費を支出していない世帯が多いために4.9%と小さいが、実際に教育費を支出したウメードガド組の3世帯では教育費支出がその他の支出総額に占める比率は12%を占めていた。3世帯の世帯当たり教育費支出額は1500ルピーであった。

医療費は市販薬の購入や医療診断にあてられた。家畜が病気になった場合には彼ら自らが家畜の病気の診断を行い、彼らの間で引き継がれている伝統的な療法で治療を行うが、効果がなければ獣医にみせる。

交通費には、移牧に来ているメンバーが冠婚葬祭や他の目的で一時帰村したり、移牧期間中に最寄りの市場に移動したり、移動予定地の放牧可能性をあらかじめ確認したり他の放牧可能な村についての情報を収集するための移動経費が含まれている。また、村に残った家族が移牧中の家族を短期間訪ねるための移動費も含まれている。実際、村に残った子供たちは学校の休暇期間に停泊村の家族を訪ねていた。中長距離移動はバス、近距離の場合にはリクシャを使うこともある。昨年度の交通費には、家畜運搬のための費用は含まれていないが、飢饉や旱魃が発生した際に、自動車やトラックで家畜(牛や羊など)を飼料の入手できる地域に運搬することがある。

その他の支出項目のなかで、修繕費は自分の村に滞在する間の出費である。教育費については、移牧に出る前にあらかじめ村で手配できる。実際に移牧先で必要になる出費は、その他の費目だけである。

移牧集団全体のその他の支出総額は93850ルピーであった。前に検討した食料の支出総額と合わせた支出総額は305410ルピーとなる。この支出総額に占める食料支出の比率は69.3%、その他の支出比率は30.7%となる。この支出構造については、マニヨール組とウメードガド組の間に相違はほぼなく、世帯当たりの昨年度の支出総額は30541ルピー(ミルクとギーを含めないと17961ルピー)であった。支出項目と支出額をみる限り、奢侈や浪費と縁のないたいへん儉しい生活ぶりであることがわかる。

おわりに

実態調査で明らかになった事項のうち重要なものを以下で確認しておこう。

まず、移動経路の変遷についてである。グジャラート州やラージャスターン州など西インドにおける家畜の移牧経路の変遷を喚起した重要な要因として、印パ分離独立による国境閉鎖、独立後の森林政策や森林伐採の展開、農業発展格差にともなう移牧経路の変動を論じた。このうち、農業発展格差は現在の移牧の経路を規定するもっとも重要な要因となっている。ただし、農業発展地域であっても移牧に適さない地域もある。実態調査により、土地所有規模や作物構成などの飼料基盤にかかわる条件や地元の牧畜カーストの有無も重要な要因であることが確認できた。

今回聞き取り調査をした契約村には、地元の牧畜カーストはほぼ居住しておらず、灌漑による冬作（ラビ作）と夏作（ウナロー作）が一定程度展開していた。契約の経緯に関する聞き取りから、さまざまな移牧集団から契約の打診があるにもかかわらず、同じ移牧集団と継続して契約していることが確認できた。これまでにトラブルがなく安心して受け入れられるからとのことであった。ただし、契約料は近年大幅に上昇しており、移牧集団にとっては大きな負担になっている。サーバルカーンター県にはラージャスターン州からのみならず、グジャラート州のカッチ県など他県からも移牧集団が流入しており、放牧をめぐる競争の結果、契約料が跳ね上がっているものと捉えられる。

移牧集団の組織と役割分担の分析から、家族労働や家族生活が共同労働や共同生活とどのように組み合っているのかの一端を明らかにすることができた。家事、搾乳、ミルク販売、厩肥回収などは家族単位で行っているが、移牧期間中の安全確保や家畜管理のための夜番をはじめとする共同作業には男女成員が結束してあたっていること、また、雌牛・雌水牛の放牧は家族単位ではなく家畜を種類年齢に応じてグループ分けをして共同で行っていることが確認できた。また、リーダーの契約交渉や開放圃場にかんする日々の情報収集が、放牧生活にとってきわめて重要であることも指摘できた。

収支の分析から、衣食住ともに儉しい生活を送っていること、食料支出に占めるミルクとミルク製品の比率がきわめて大きいことが確認できた。収入を正確に捕捉することはできなかったが、数名の回答者から、経費を差し引いた月々の世帯所得は4000ルピー（＝8000円）ほどであるとの報告を受けた。厳しい移牧労働の対価としてはきわめて少額であるが、母村での彼らの住居や暮らしぶりから実態に即した所得額におもえた。

何世帯かの家族は就学する子弟を母村に残し、移牧に来ていた。教育が次世代以降の牧畜カーストの職業多様化の鍵になることは間違いないが、就学する児童がまだ少ないことに加え、近年は教育年数だけではなく教育の質が重要になってきている。現役世代は、移牧を取り巻く条件がさらに悪化しても、この仕事から離れることは難しい。この状況のなかで、就業上の世代交代をどのように果たしていくのかが、移牧集団の大きな課題となっている。

今後も調査したサンプル世帯の動向を注視したい。サーバルカーンター県ではラージャスターン

州からの移牧集団のほかに、地元3村の日帰り放牧世帯と舎飼い世帯の計60世帯の社会経済調査も行っているため、別稿でその報告をまとめる際に再度、移牧経営の特徴を他経営との対比で明確にしておきたい。

[付記] 本稿は、平成21年度～24年度科学研究費補助金（基盤研究（A）：海外学術調査）研究課題番号21251011『熱帯地域における農民の家畜利用に関する環境史的研究』（代表：池谷和信）の一環として、インドで実施した実態調査結果に基づいて執筆した。上記科学研究費の研究会では代表をはじめ多くの参加者から調査テーマについて貴重なアドバイスを得ることができた。また、調査の過程で、Manav Kalyan Trust 所長の Lallubhai Desai 氏、コーディネーターの Sanjay 氏、調査員の Lala Ram 氏、および調査地の多数の牧畜民、農民から多大なる協力を得ることができた。ここに記して謝意を表す。

注

- (1) 本稿では、「移牧」を飼料を求め季節的に移動放牧を繰り返す家畜飼養形態を指す用語として使用する。「移牧集団」とは複数の世帯で形成される移牧の集団のことを指す。
- (2) グジャラート州のサーバルカントー県で、家畜利用に関する環境史研究の一環として、3種類の家畜飼養形態（「移牧」「日帰り放牧」「舎飼い」）の資源や環境との関わりを明らかにするために、ラージャスターン州からの移牧集団のほかに、地元3村の日帰り放牧世帯と舎飼い世帯の計60世帯の社会経済調査を行っている。移牧集団の調査は、全体の調査の一部をなす。なお、この調査は、ケードブラフマーを拠点とするNGOである Manav Kalyan Trust と共同で進めている。
- (3) イギリス植民地期には牛は最も有用な生産手段として、政府の農業、家畜報告書のなかに牛の再生産と流通に関する記述が多くみられた。近年では、Bharwada & Mahajan (2006) が牛移動に関する優れた歴史研究を行っている。
- (4) 灌漑、多収量品種、化肥などの農業投入財がセットになった農業革命は、インドでは1960年代の後半から始まった。当初、その効果は農業先進州に限定されていたが、1980年代以降全インドに浸透した。
- (5) 1970年に始まったミルクの流通革命のことを指す。グジャラート州のアムルデイーをモデルにミルクの生産者協同組合が展開した。
- (6) トライブとは主に丘陵・山岳部に居住する部族民のことで、行政用語では「指定部族」(Scheduled Tribes) と呼ばれている。後進的な集団だとして、諸種の優遇措置の対象とされている。本稿での「トライブ地域」とは彼らが集住する丘陵部を指す。
- (7) ラージャスターン州では Raika と呼ばれる。ラージャスターン州からグジャラート州にかけて分布する牧畜カーストで、牛や羊、山羊の移牧や日帰り放牧を行っている。
- (8) イースラー村の村書記からの聞き取り（2010年8月13日）。
- (9) ダートライー村の村書記からの聞き取り（2010年8月13日）。
- (10) マニヨール村の村書記からの聞き取り（2010年9月7日）。
- (11) マニヨール村の村書記からの聞き取り（2010年9月7日）。
- (12) Village Directorate, Sabarkantha District, Census of Gujarat (2001) のマニヨール村データから筆者が算出した。
- (13) ウメードガド村の村長からの聞き取り（2010年9月7日）。
- (14) Village Directorate, Sabarkantha District, Census of Gujarat (2001) のウメードガド村データから筆者が算出した。
- (15) マニヨール村の村長からの聞き取り（2010年9月7日）。
- (16) ウメードガド村の村長からの聞き取り（2010年9月7日）。
- (17) 以上は、イースラー村の Unaji 氏からの聞き取り（2010年8月13日）。
- (18) マニヨール組の Khimaji Malaji 氏からの聞き取り（2010年1月3日）。
- (19) ただし、マニヨール組がバナースカントーで移牧を行った際に、2日間ほど民間業者が集荷に来なかった日があったそうである。Khimaji Malaji 氏からの聞き取り（2010年8月13日）。
- (20) ウメードガド組の Ganeshbhai Mathjii 氏からの聞き取り（2010年1月3日）。

(21) 公道を移動中にさまざまな車両の運転手に罵声を浴びせられることの報告も受けている。運転する立場からみると、路上の家畜は事故の大きな原因になり、たいへん危険におもえることは確かである。

参考文献

池谷和信(2006)『現代の牧畜民：乾燥地域の暮らし』古今書院。

篠田 隆 「インド・グジャラート農村における雌牛・雌水牛の所有と流通：調査村の事例を中心として」『大東文化大学紀要(社会科学)』第48号、大東文化大学、2010年3月。

篠田 隆 「インド・グジャラート農村における雄牛の所有と流通：調査村の事例を中心として」『大東文化大学紀要(社会科学)』第45号、大東文化大学、2007年3月。

Kavoori, P.S. (1999), *Pastoralism in Expansion : the Transhuming Herders of Western Rajasthan*, New Delhi : Oxford University Press

Agrawal, Arun (1999), *Greener Pastures : Politics, Markets, and Community among a Migrant Pastoral People*, New Delhi : Oxford University Press

Srivastava, V.K. (1997), *Religious Renunciation of a Pastoral People*, Delhi : Oxford University Press

Sontheimer, Gunther-Dietz (1993), *Pastoral Deities in Western India*, Delhi : Oxford University Press

Bharwada, C. and V. Mahajan (2006), 'Lost and Forgotten : Grasslands and Pastoralists of Gujarat, *Seminar* No.564, August 2006.

Government of India (2007), *Census of India 2001, Gujarat : Sabarkantha District*, Delhi

Government of India (2005), *Census of India 2001, Rajasthan : Sirohi District*, Delhi



写真1 雨の中、放牧へ（イースラー村）



写真2 雨期におけるイースラー村での寄り合い



写真3 簡易住居の外観



写真4 住居内部：竈と敷布団



写真5 同行した子供たち



写真6 家畜柵の出入口



写真7 家畜柵内に残る子牛



写真8 放牧風景



写真9 ウメードガド村の水のみ場にて (Manav Kalyan Trust 提供)



写真10 直接ミルクを飲み空腹を満たす移牧者 (Manav Kalyan Trust 提供)